

春燈

昭和二十一年七月二十一日
日蓮三種郵便物認可

十一月十一日
日蓮三種郵便物認可

11月号

PDF制作 俳誌のsalon

櫻桃子の句

親がらす歩み子がらすつづきけり

自註現代俳句シリーズ

『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

自註にへ岬の砂丘で海と空と砂ばかりの茫漠の中に烏たちは居た。「烏の赤ちゃんなぜ泣くの…」と唄ってやると子供は泪ぐんだとある。この子供は美菜子様。夏も終りの頃か親がらすの後からよちよちついて行く子がらすの情景が浮かぶ。不憫な我が娘を深く愛しむ親心を、淡々と親子がらすに写したところが惻々と胸を打つ。櫻桃子の境涯を知る者にとって涙を禁じ得ない。

諸戸せつ子

櫻桃子の句

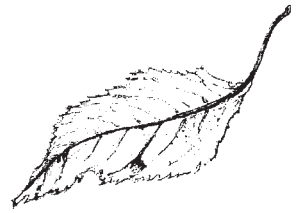
滝一条天地にまことつらぬけり

平成十一年十月号春燈誌上

万太郎、敦と二人の師に生まれ、春燈をこよなく愛し、その伝統を守りながら如何に新境地、新傾向を開拓し、老衰し、沈滞している俳壇に清新な息吹を注入して、敬遠され勝ちな若年層の人達にも俳句の魅力を認識させようと、彫心鏤骨された先生の魂の叫びである。先師敦の十三回忌も近く、春燈俳句の真髓を追求して来た己の姿に一点の曇りも無かったことを自らに問うている。

小張 昭一

主宰の句



鈴木榮子

伊東屋に手帖出る日の宵の秋

とんとんと心の丈の隙も秋思

照紅葉塔の扉を振り冠り

带状庖疹と診断されて背ナの汗

面影橋といふさへ秋気漂へり



古都散策

多田生湖

飛鳥川七瀬の蘆のそよぎけり
甘樫の丘ゆ三山霞みけり
巨石の積まれし古墳草萌ゆる
亀鳴くと亀石いまに黙しけり
お田植祭いまに残れる戯れ芝居
石舞台背に月の宴かな
キトラ古墳一画壁画に黴きざし
万葉の野にかぎろひの立つを見き
露けしや大津皇子の相聞歌
鶯の鳴きつぎ遊子迎へけり

出羽路秋光

卜部黎子

靈峰に透る法螺の音秋気満つ
山伏の法螺の朱の紐葛あらし
秋光や古色重ねし五重塔
癸心の杖に焼印秋薊
湯殿山に再生信ず秋の蝶
夕あきつ旅荷を軽く坊泊り
盆花に水なみなみと辻地蔵
稔田や雲のとけゆく鳥海山
庄内柿低く色づく城下かな
十六夜のいづこめ人形まなこ濡る

当月集

鈴木 榮子選



○ 宮崎裕子

秋田訛の地口のさびや踊唄
闇恋ふる彦三頭巾や雨の月
霧襖ひらき一村現れぬ
行合の雲流るるや羽後の秋
一葉散る紅花商の屋敷蔵

○ 荻野嘉代子

朝顔の紺の気負ひし木曾の天
山法師の実を含みみる秋風裡
秋の蟬絵島くぐりし不浄門
周平の「義民」鳩首の夜長かな
宿はづれの模擬高札や広重忌

○ 田嶋洋子

○ 岡野イネ子

手庇の秋日に陶工柿右衛門
忘れものまた鍵あけて秋扇
勇気ある鴉野分の中を行く
留年の子の独壇場運動会
門付は恩地喜多八鏡花の忌

二上りに三味の佳境や踊唄
出羽小富士の機嫌に育つ西瓜かな
最上川秋思の渦となりにけり
誰がための紅花染や十六夜
椋鳥の群智恵子の空の広さかな

○ 久保久子

ひとすぢの蠟涙とどめ今朝の秋
秋蟬に鳴きつつまるるほとけ徑
縫ひ合はず形見の端切れ盆の月
鳥海山の雲押し上ぐる穂田の風
一斤染の出羽の夕日や吾亦紅

○ 長谷川歌子

無花果に乳滲みぬし母郷かな
おろされて秋の風鈴寡黙なる
地芝居の絶句しばしや文士劇
影絵芝居のジャワ人形や星月夜
発心の天を指せり蓮の実飛ぶ

○ 後藤眞由美

鬼灯の疹いて熟るる秘密かな
星月夜日記を綴る銀のペン
早稲の香や路肩あやしき柵田道
天の川星の子眠る宙の街
花野道はらみつ色の入日かな

○ 森下賢一

滝の前経済市況聞く男
友死してわれと水虫とが残る
パリに根を下ろしえざりしとろろ汁
昼酒を飲まざりし父酔芙蓉
秋刀魚ほめ会社罵る居酒屋に

○ 長谷川邦子

蔓荔枝日にかがやきて風にゆれ
ひとりゆく秋蝶のうしろすがたかな
秋の蟬あまりにかろき骸かな
母のはかゆきてかへりぬ曼珠沙華
明眸や塔婆をのぼるきりぎりす

○ 佐藤玲子

芒原みちのくの旅はじまりぬ
谷紅葉山の深きをはかりをり
「鈴虫電車」すず虫ご機嫌ななめかな
さいはての小駅に文庫葛の花
秋の潮最北端到着証明書

春燈の句

鈴木 榮子選



踊笠高くはね上ぐうなじかな

東京 小泉 三枝

踊子のおもひ端縫の紅絹の色

葉鶏頭彩一身にあふれしめ
手入れして狭庭の秋を早めけり

盆踊り生者に続く亡者かな

餌を捉へほつと浮き身の夏燕
忘却とは都合よきもの生身魂

町並に古色戻りぬ祭あと

炎昼や胸にひんやり貼葉

秋の蝶ぜんまい重きオルゴール

東京 佐渡谷秀一

法師蟬去りし夕映え眺めけり

秋刀魚焼けば数珠仏々と声出して
月白の妻亡きあとの厨かな

蔵書印みやびな古本処暑の街

納骨にかなかなの声収めけり

秋大風韃靼蕎麦を啜りけり

ひとひとり居なくなる夜の虫時雨

冷房を入れない日々や老いの意地

東京 馬場 宏一

コンサートはねるや繁し虫の声

またひとつ言ひ忘れしや秋の声

秋爽やムーティの振るシューベルト

横むくは思案の果か思ひ草

身にしみて消化試合の人生よ

昨日より秋めくものに風の音

風吹けば吾に返れと虫の鳴く

東京 久永 淳子

出来過ぎのキャベツのあはれ九月かな

亡びゆく言の葉惜しむ白木槿
山の湯に力解きて虫を聞く

東京 小林 リン

千葉 伊藤 賢三

神奈川 金子 輝

余言

鈴木 榮子

歎異抄播きて吾が夜長かな

伊達 荷声

親鸞の歎異抄はその逆説的な警句が人の心をとらえるのであるが、異議も多く唯円が編纂したとされている。

言うなれば有名な第三条の冒頭の言葉である。即ち「善人でさえも往生できるのだから、まして悪人は当然のことだ」と言っている。例の法然の言葉だった「善人なほもて往生をとぐ。いはんや悪人をや」のところである。だが一般世間では「悪人でさへ往生できるのだからまして善人は当然だ」といつているが他力本願、自力本願を踏まえて他力の救済をおたのみ申し上げるならば、浄土への往生をとげられるのだということなのだ。何回も読まないと中々分らない。そこが逆説なところで、作者は一条、二条、と播いて秋の夜長高僧の

教えを理解しようとしているのだ。

キリスト教のこれも有名な「――繙かず茹らず蔵に納めず然るに汝らの天の父はこれをも養い給う。まして汝らをや」と同じなのだと思っている。西洋の言い方の方が分かり易い。

ひとひとり居なくなる夜の虫時雨 金子 輝

翻訳ものにこんな名前のミステリーものがなかったか。またはそれを承知で置いたのか。一家の、または仕事場の残業などにもそんなことがある。

別にひとりが居なくなっても淋しい訳ではない。家内の各々その日の予定を了えれば湯に入り床につくだろう。

ひとりというものは拘束がない。それでもみんないなくなったら一寸淋しい気がする。虫時雨がその淋しさを一層深めるのだ。